

精選
名著複刻全集
近代文學館

— 作品解題 —

ある。ひとつひとつの文学史上の不滅の意義については、諸家の解説にゆずって贅しない。また、谷崎潤一郎の『春琴抄』の漆表紙は、今回は、朱色をかえて、別装の黒漆本を採用した。さらに、明治初期の風俗画として評価の高いビゴーの作品——その石版画中もっとも出来のいい『東京芸者の一日』を附録とした。

かくて、「新選」、「特選」、「精選」を通して、名作初版本をもつてする文学史的体系がほぼ完成することになる。

制作には、資材と技術に新たな吟味を慎重に加え、用紙の特漉きをはじめ、すべての点について、能うかぎりの向上を期した。

この編集・刊行にあたって、著作権者、出版社各位をはじめ、貴重な稀翹書の提供を賜った各位、顧問藤森善貢氏はじめ制作に惜しみない努力を払っていただいた各位、それぞれの御協力に深く感謝申し上げます。

一九七二年五月一日

名著複刻全集 編集委員長

稲垣達郎

「精選 名著複刻全集 近代文学館」刊行について

日本近代文学館は、さきに、明治以来今日まで百余年にわたる日本近代文学の名著を初版により複刻、「名著複刻全集 近代文学館」を刊行し、それに収録できなかった名著を、さらに「精選 名著複刻全集 近代文学館」として補い、困難な、そして画期的な規模の複刻全集を実現しました。幸い、この複刻全集は御好評を得ましたが、最初の四セットから成る「名著複刻全集 近代文学館」の再刊の要望が多く、これをより広く普及する目的で厳選した「新選 名著複刻全集 近代文学館」を引続き刊行しました。今回は、この「新選版」および前記「特選版」の二セットに収めることのできなかった名著を、最初の全集より精選し、さらに新版八点を加えた形で、完結版ともいふべき「精選 名著複刻全集 近代文学館」を刊行することになりました。

明治以来日本の近代文学は、現代の思想・文化に寄与する幾多の作品を残してきましたが、相つゞ戦争や災禍を経るなかで、これら名作・名著は著しく散逸し、とくにその初版本は愛書家・研究者でさえ閲覧することのできないものが数多くあります。

近代文学館では、著作権者・版元その他多数関係者の協力と憐ほるぶ・ほるぶ出版の支援を得て、これらの日本文化の貴重な遺産ともいふべき名作・名著を、初版本どおりもとの姿で正確に複刻・再現することによって、当時の文化の一端に触れることはもとより、学校教育の生きた教材として、研究資料として、また愛好家の秘蔵版として、日本文化・日本文学の発展に役立てたいと考えるものです。

全集編集委員

伊藤 整	稻垣 達郎	小田 切進	木俣 修	塩田 良平	瀬沼 茂樹	成瀬 正勝	福田 清人	吉田 精一
------	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-------

目次

近代文学史展望……………	瀬沼茂樹	一
作品解題		
坪内逍遙・小説神髓……………	稻垣達郎	六
尾崎紅葉・金色夜叉……………	塩田良平	三
徳富蘆花・自然と人生……………	佐藤 勝	五
國木田獨歩・運命……………	福田清人	五
蒲原有明・有明集……………	野田宇太郎	四
泉 鏡花・高野聖……………	村松定孝	五
島崎藤村・春……………	三好行雄	五
北原白秋・邪宗門……………	木俣 修	五
夏目漱石・三四郎……………	猪野謙二	六
徳田秋聲・懺……………	伊藤 整	五
石川啄木・悲しき玩具……………	久保田正文	六

森 鷗外・青年……………	澁川 驍	三
田山花袋・時は過ぎゆく……………	野口富士男	七
萩原朔太郎・月に吠える……………	伊藤信吉	三
永井荷風・腕くらべ……………	成瀬正勝	七
志賀直哉・夜の光……………	紅野敏郎	一四
佐藤春夫・病める薔薇……………	高田瑞穂	一九
有島武郎・或女……………	瀬沼茂樹	二三
武者小路實篤・或る男……………	稻垣達郎	二六
宮澤賢治・春と修羅……………	中村 稔	二三
幸田露伴・幽祕記……………	篠田一士	二七
川端康成・感情裝飾……………	山本健吉	三三
葉山嘉樹・海に生くる人々……………	小田切 進	三六
横光利一・春は馬車に乗つて……………	保昌正夫	四〇
芥川龍之介・侏儒の言葉……………	吉田精一	四四
宮本百合子・伸子……………	本多秋五	四九

林 芙美子・放浪記	和田芳恵	二五
梶井基次郎・檸檬	高田瑞穂	二六
谷崎潤一郎・春琴抄	円地文子	二七
太宰 治・晩年	奥野健男	二八
中原中也・在りし日の歌	大岡昇平	二九
高見 順・如何なる星の下に	小田切 進	三〇
ジョルジュ・ビゴー・東京芸者の一日	匠 秀夫	三一
近代文学史年表	編集部	三二
複製制作の概要	編集部	三三
あとがき	稲垣達郎	三四

近代文学史
展望

近代と伝統

わが国の近代文学を考えると、まず西洋文学の移入によって、直接または間接の感化をうけていることが思い浮かぶ。鎖国と封建とが本質的に同義語ではないように、開国と近代とは同義語であつたわけではない。しかし開国によって西洋との接触が公然とひらかれるとともに、日本の近代化の端緒がきられ、開国が同時に近代を意味するかに思われるまでに、西洋の学芸の影響はいちじるしく、西洋が近代として働いていることは疑いの餘地がない。もちろんこの影響は急速に浸透したから、夏目漱石をして外発的と嘆かせるまでに皮相であり、単なる模倣から一見その痕跡をみとめがたい内実にまで及ぶ、さまざまな階梯がある。それにしても、西洋の学芸が浸透するにつれて、日本人の思想・感情が変容し、日本文学が江戸文学と異なる近代文学に次第に形成されていったことは紛れもない事実である。いうまでもなく、日本文学は、アジア諸国民の間にあって、早くからインド文化、或いはシナ文化の感化をうけ、

その中から独自の文化を形成してきたし、外来の文化の受容によつても、その独自性を發揮して、さまざまな固有の伝統をきずきあげる自信を深めていた。しかし、開国による西洋文化の受容の場合はいふ事情が異なっている。和辻哲郎が指摘するように、織田信長の時代に西洋世界と歩調をあわせ、東西からする「世界的視圈」の成立も、鎖国によつて脱落し、鎖国日本は世界圏との間に大きな断層を生じていたという決定的事実がある。次に西洋の学芸は、インドやシナの東洋の学芸とは異なつて、まったく異種の学芸であり、極端に言えば、容易に融和しがたい長い固有の伝統をになつていふという事実である。もちろん、鎖国後も、長崎出島を通じる細い葦の髄の存在によつて、世界圏との連絡があり、蘭学によつて西洋の学芸の一斑に接触し、これを受容できる基盤もなかったわけではないが、質量までも問題の本質を変えるようなものではない。

そこで、西洋文化の移入にはじまる日本の近代化の歴史は、開国による日本の世界圏への登場または復帰を意味し、旧日本と西洋の近代との対決の開展として進行する。一般的にいえば、多くの明治の知識人に塗炭の苦悩をになわせ



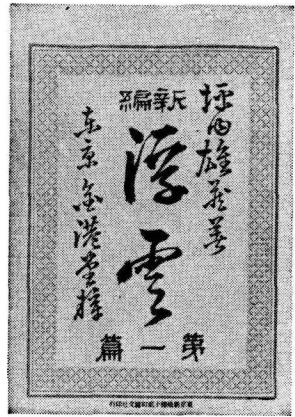
『当世書生氣質』(第一冊)表紙と
はしがき冒頭(複製版)

た西洋と日本との対決の問題であり、これに重複して、新日本と旧日本との対決の問題が現われてくる。これを一口に近代と伝統との問題といってみたり、或いは進歩と保守との問題といってみても、事態は決して相即的に展開するわけではないから、極めて錯雑した形態をとって、問題はむつかしいといわなければならない。たとえば、近代文学の理念または範型を西洋の近代にもとめて、これをもつて日本の近代文学の進展をはかり、そこにいくたの歪み^{ひずみ}を発見できるにせよ、西洋の近代文学が唯一絶対の理念または範型であると考えてよいかどうか、疑問の餘地がある。日本の近代文学の形成にあたって、その創造力となった原動力がすべて外発的なものとどまらず、なお日本民族の生

命力またはモラル・エネルギーに由来することに思いをめぐらせば、とにかく独自の文学創造の要求あるいは理念追求の要求があり、自主的な能力と工夫とがあつたと思わざるをえまいと、私は考える。

とにかく、開国以後、日本文学に影響を及ぼした西洋文学は同一でも、また均質でもないし、また西洋各国の文学の特異性によっても異なっている。単に生活様式の変化につれて現われてきた開化文学は、江戸文学の伝統によつて、新奇な風俗を戯作にとりいれ、多少とも戯画化して、新奇病^{しんきびょう}を諷刺しているとはいえ、過渡的現象にとどまる。しかし、啓蒙文学や政治文学は、英米文学やフランス文学によつて、それぞれに異なつた感化を及ぼし、デイズレリのよ

うな政治家、ユゴオのような文学者が文学や政治に果たした役割を知るとともに、朱子学または陽明学によつて受けとめ、これをやがて近代文学育成の基盤とした。しかし、今はその詳細には触れまい。



『浮雲』第一篇表紙（複製版）

日本の近代
文学の発達は
明治二〇年前
後とするのが
通説であり、
坪内逍遙の
『小説神髓』

（明治一八）および『當世書生氣質』（同）の出現をもって端緒が切られる。前者は、一つには江戸文学以来の文学観の批判による文学の独立であり、一つには新しい小説観の提唱である。後者はこの健康な主張を作品化し、稚いながら近代知識人の發生に着目した。逍遙が「勸善懲惡」をもって文学を世俗教化の具とする見解を斥け、「小説の主腦は人情なり、世態風俗これに次ぐ」とし、「おのれの意匠」をもってする脚色を避け、「只傍觀してありのままに模写する」ことを薦めた。近代写実主義の提唱は逍遙の読みあさった西洋文学の知識に負うものであり、一八八〇年代の英仏の文学が自然主義の段階に達しており、この主義の主張が採用されていることは明らかである。しかし自然主義

は西洋社会の複雑な背景から出た複雑な条件をもった理論であり運動であり、その複雑な内容を理解する条件が逍遙に欠けていたから、世態人情の模写を紫式部または本居宣長の説く物語観に結びつける程度を出ることはむづかしかった。だから、その主張を具体化した『當世書生氣質』は、時人にいかに画期的なものと思われたにせよ、開化文学と実質的には変わらぬ幼稚な戯作の改良にとどまった。これが西鶴復興を誘い水にして尾崎紅葉や幸田露伴のような擬古主義の勃興をうながし、明治二〇年代に硯友社や根岸派の盛時をむかえた。紅葉は、明治三一年以降、『金色夜叉』の大作に取組んだが、明治三〇年代の明治社会を背景にして、『當世書生氣質』の後身である知識人たちの世態人情を写実するにとどまったとみることもできよう。

二葉亭四迷は、『小説總論』（明治一九）をもって『小説神髓』に対決し、その主張を明治二〇年以降の『浮雲』に活かした。逍遙の小説改良において曖昧に終わった新時代と旧時代との対決が格段の落差をもって成就できた根本には、四迷が依拠したロシア文学の本質的な新時代性に負い、また四迷がロシア文学を正当に受容できる比類のない幸運に



親友社の人々（『我楽多文庫』第10号・明治
21年10月より）

めぐりあわせたことがある。だから、模写こそ小説の神髄であることには変わらぬとしても、単なる「現象模写」ではなくて、よく「実相を仮りて虚相を写し出す」、いいかえると、現象（形）となつて現われる意（アイディア）を認識し、感動によつて生動的に表現することを要請した。四迷はロシア文学から人間心理の複雑な多層構造に開眼するとともに、そこに眞の近代知識人の範型を考え、その中で自己を追求し、かような知識人の明治社会への不適応を明らかにし、無節操な追従型の人物の立身出世と対照的に『浮雲』に描いてみせた。かように現実と倫理との乖離（かいり）を新旧世代の対立と複合させ、これと表裏する社会問題への

の意味をも含めたところに、近代文学としての重大な問題が先取せられて

いたが、時人の理解を絶し、二〇年後の自然主義作家によつて評価されるまで、孤立させられ、むしろ芸術的な鑑賞に堪える翻訳文学によつて、明治作家に多大の感化を与えるにとどまつた。

日本の自然主義は明治四〇年前後に現われ、すでに二〇世紀に入つていた。西洋では自然主義が凋落し、「世紀末」から近代の危機がさまざまな形で現象している。したがつて、西洋諸国のさまざまな自然主義に学びながら、同時にその帰結や批判をとりいれ、一層複雑な様相を現わさないわけにはいかなかった。

国木田独步は、「徳川文学の感化も受けず、紅露二氏の影響も受けず、従来の我文壇とは殆ど全く攷關係の着想、取扱、作風」（『不可思議なる大自然』）たることに確信をもち、後年、ツルゲエネフ、トルストイ、モウパッサンに触れて、その感化をうけたにせよ、その由来となる「本源」がワアズワスにあることを自負をもつて告白していた。もちろん、独歩は江戸文学はもとより同時代の紅露の感化をうけなくとも、吉田松陰、遡つては陽明学の教養によつて「事業慾」その他の実人生への野望に駆られ、ワアズワス

國木田獨歩



新編第九卷第一號

獨歩（明治41年6月歿）の追悼号を出した「新潮」（明治41年7月）表紙

によつて「吾が理想の存在を信じ」―「人生の批評」に出で、本質的に浪漫的

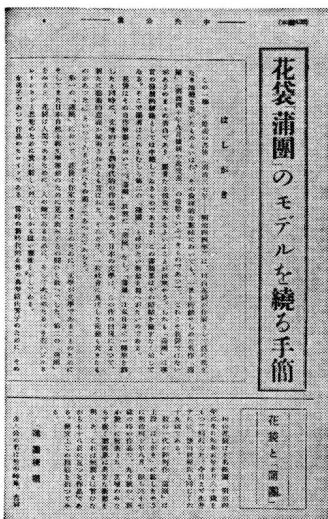
短篇小説を生みだした。しかし晩年の小説『疲勞』の紳商にみるように、実生活の奔命につかれ、疲勞に斃れる短命に終つた。獨歩はたしかに自然主義の先駆者たる側面を備えながら、感情の解放を試み、孤独に生きる浪漫的心情を核心としてもつていた。

詩人としての面目を発揮する。しかも獨歩に異物感を自覚させていたにも拘らず、浪漫主義と同義語といつてよい自然主義という言葉――この意味の用語はまた前期自然主義の評論家長谷川天溪らにも認められる――をもつて、田山花袋などの僚友によつて、反対の歴史的概念としての自然主義に数えられるところに、概念はもとよりわが国の自然主義そのものの錯雜した曖昧さがあり、ある意味では日本自然主義の実質をしめしている。

もともと西洋の自然主義は一九世紀における科学思想の制覇にもとづき、單なる写実主義にとどまらず、実証哲学にもとづく方法論の把握によつて、対象の精密な測定を行なつて得た觀念をもつて、人生または社会を再構成するにあつた。かような意味で、自然主義の正統を実現できた近代小説は、島崎藤村の『破戒』（明治三九）を第一とする。『破戒』がロシア文学の感化をうけ、社会問題の意味において部落民の小学教師を客觀的存在として提出し、しかも教師の内部生活に立入つて、自己告白を展開し、真に作者の生命につながる血肉の人物と化したから、近代人の心理の脈絡を微妙に表現することができた。四迷の『浮雲』に比肩する近代小説となりえた秘密はこの仮構を藉りて、作者の自己告白を可能とする創作方法の確立であり、新鮮な文体の獨創である。

第二文集『獨歩集』（明治三八）、第三文集『運命』（明

治三九）は、獨歩の本領を最もよく現わした作品を多く含んでいる。明治社会の実生活の精神的空虚に傷つき、そこから感得した觀念によつて、四迷のような意味で近代的な



『花袋「蒲團」のモデルを繞る手簡』冒頭

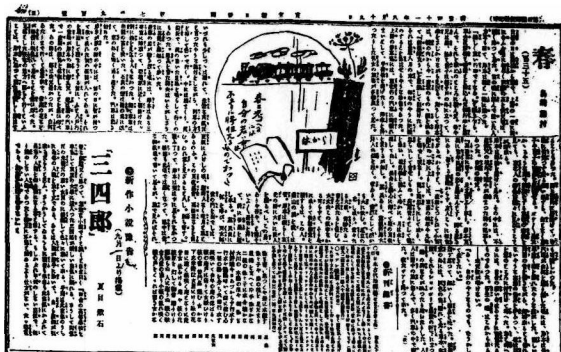
しかし、田山花袋の『蒲團』（明治四〇）を機縁にして、作者の私生活を告白する場として、小説という形式が採用され、「私小説」への道がひらかれた。もちろん、『蒲團』は、単純に世人の考えるような私生活そのままを告白した小説ではなかったことは、後日発表された書簡（中央公論）昭和一四年六月号『花袋「蒲團」のモデルを繞る手簡』その他によって明らかであり、かなりの作為が加えられていた。だが、仮構を廃して作者自身が演技者となり、作者の経験した事実を「人生の真实性」の保証をもとめる安易な筆に出た事実もまた否めない。花袋はフランス文学によって人間の獣性、とくに性慾の力を顕現する道を

学んだけれども、その根源にある人間の不可解なもの

への洞察、あるいは虚無的な心情に深く思いをいたさず、中年の利己的な心理を樂天的に表現したにとどまる。一口にいえば、花袋によって仮構によらず、作者自身を演技者に仕立て、芸術的に自己告白をおこなう一連の自伝小説が日本自然主義文学の主流を占める機運を醸成した。藤村の『春』（明治四一）、『家』（明治四三）、花袋の『生』（明治四一）、『妻』（明治四二）、『縁』（明治四三）、泡鳴の『耽溺』（明治四二）、『放浪』（明治四三）、秋声の『衝』（明治四四）などを挙げれば、多くをいう必要はあるまい。

かようにして、日本自然主義は、本来、仮構であるべき小説を斥けて、究極において作者の経験した私生活の記録とし、この意味で小説の非小説化を推進していくことになり、葛西善蔵に一つの範型をみいだすまでに、「心境小説」、この伝統的な境地を極北とするにいたった。どうして私小説がわが国において普及するにいたったか、その理由を考えてみよう。

自然主義は、たしかに浪漫主義に対立する文芸思潮でありながら、西洋において浪漫主義が行なったと同じ役割を果たす近代主義の意味をになっていた。自然主義は「旧物



『春』の連載と『三四郎』予告が載った「東京朝日新聞」(明治41年8月19日)

破壊」を唱え、中世主義・封建主義から脱却して、個人の感情を解放し、社会的規範よりも人間の内部の尊厳性を尊重する近代主義として、西洋の浪漫主義の確立した価値の実現をはかった。しかし自然主義という知的方法によって自己または人生に飽くなき追求をこころみる方法と厳しさを欠いて、むしろ情緒的・気分的に掬いあげ、自己告白の露骨さに驚き、人間の真実性をみとめても、人間性の不可解な根源にまで分析をすすめることができなかった。だから、自然主義運動によって日本人の思索生活・感情生活は大きく変化したけれども、実生活との懸隔に奔命に疲れ、明治の疲労に虚無感をやしな

い、知らず識らずのうちに、或は意識裡に、日本的伝統に帰っている。私小説が究極において心境芸術に安心をもとめるにいたったのはその一つの顕現である。

田山花袋に、藤村の『家』または『夜明け前』にもたえうる『時は過ぎゆく』(大正五)がある。花袋の叔母の嫁した館林藩士の一族の生涯、その栄枯や死生を追求して、自伝小説以外に作風の幅をひろげた代表作の一つである。

しかし人間の生涯を万物流転——題名にいう過ぎ行く時の相において観照し、これを自由と理想とを吸収した「自然」——必然と現実として観じるときに、自己を消して、一切

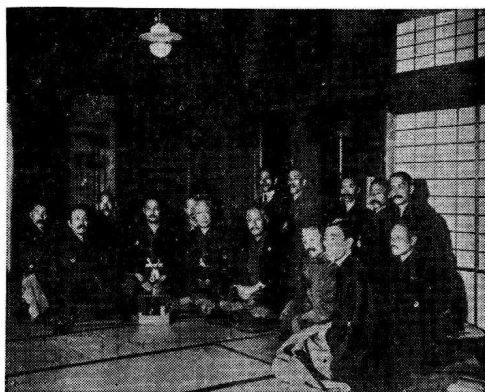
を因縁の所行とみる仏教的世界観に赴いていることは明らかである。これより一年遅れた『残雪』(大正六)から『百

夜』(昭和二)まで、愛慾を主題にとりあげ、そのうちに淨福をみいだす宗教的展開は、フランス自然主義、ユイスマンの跡を追いながら、日本仏教に帰着するところの伝統

の力を考えさせる。類似なことは『新生』から『夜明け前』にいたる島崎藤村に見出されるし、また「悲痛の哲理」を説いた岩野泡鳴が大正四年に日本主義を主張し、神

道思想を唱えたことにも、みられる。

道思想を唱えたことにも、みられる。



雨声会に集まった鷗外、蘇村、荷風らの人々（前列左より蘇村、魯庵、花袋、西園寺公望、斎藤実、鏡花、鷗外、荷風、風葉、後列左より桂月、竹越三叉、小波、春浪、天外、宙外、柳浪）

自然主義を「舶来の唐物」とみなした夏目漱石は単なる自然主義の反対者ではなく、自然主義の為し得なかった人間を通して観念の実験をこころみ、人生のXに挑んだ近代小説の確立者であった。しかも英文学に学んで、わが国の西洋文明の移入の仕方に疑惑をいだき、西洋と日本との問題、ひいては開国によって必然的にもたらされた日本の宿命的な苦悩について真剣に思索をめぐらした。『三四郎』（明治四二）の初めにおける広田先生の唐突な「（日本が）

亡びるね」という発言は、日露戦争に勝利して有頂天になつてゐる国民に冷水三斗を浴びせるにとどまらず、日本

について悲観的な考えしかもてなかつた漱石の深憂を現わすものである。『それから』（明治四二）には次の一節がある。

「代助は人類の一人として、互を腹の中で侮辱する事なしには、互に接觸を敢てし得ぬ、現代の社會を、二十世紀の墮落と呼んでゐた。さうして、これを、近來急に膨脹した生活慾の高壓力が道義慾の崩壊を促したものと解釋してゐた。又これを此等新舊兩慾の衝突と見做してゐた。最後に此生活慾の目醒しい發展を、歐洲から押寄せた海嘯と心得てゐた。」

この二つの因數は、何處かで平衡を得なければならぬ。けれども、貧弱な日本が、歐洲の最強國と、財力に於て肩を較べる日の来る迄は、此平衡は日本に於て得られないものと代助は信じてゐた。さうして、斯る日は、到底日本の上を照さないものと諦めてゐた。だからこの窮地に陥つた日本紳士の多數は、日毎に法律に觸れない程度に於て、もしくはたゞ頭の中に於て、罪惡を犯さなければならぬ。さうして、相手が今如何なる罪惡を犯しつゝあるかを、互に默知しつゝ、談笑しなければならぬ。代助は人類の一人として、かゝる侮辱を加ふるに